編集後記

▼アンケートの高校生の意見は健康です。「世の中がこんなにひどい状況だからこそ、何とか先に希望を見いだすべく頑張りたい」設問9、10、11回答の裏の気持ちが見えます。投げやりの生徒はごくわずかです。

▼自由記述欄「教師の人間性」を問う声が聞こえます。外見だけでは見えない繊細な生徒の人間観察力、かってそれを自分も持っていたという青年教師、それらを剥ぎ取ってゆく力が学校で肥大してゆくのはなぜでしょう。

▼「開かれた学校づくり（学校評価制度）」が否応なしに始まります。授業改善、生活相談等々で教師の集団的な力量が試される制度です。生徒たちの願いに応える学校づくりを心から期待します。

▼藤田氏の論文は生徒たちの内面をとらえての力作でした。さまざまな詳細な調査が各学校に届いているのでしょうが、それらに基づいての学習と実践方針が立てられないほど、学校が忙しいこともわかりました。

▼鈴木氏が語る就職事情（地域産業の労働事情の激変、進路アドバイザーの役割、職場体験学習等々）は早くから生徒や親が聞けると助かるなーと思いました。

▼三ッ井氏はすぐ剥落する「入試合格の手段としての学力」は大学入試制度が大きな要因と指摘し、「自学自習」する力と「基礎的事項と基本」の理解力を地道に培っている生徒たちの学びの道を対比的に紹介しています。

▼内山氏から総合学科での進路選択体験学習の展開と学んだ生徒の、また受け入れ事業所の貴重な意見等の紹介をいただき、どの高校にも進路意識形成を軸にした学習活動が展開される必要性を提起していただきました。

▼木村氏が紹介した「こもれびの会」が県内各地にたくさん生まれて、出会った親たちが語り合いつつ力をつけていけるといいですね。

▼笠原一朗さんの著書『かくして、烏屋野潟は残った』の編集に携わった久保田氏から、皆さんの購買をお願いされてます。事務所に本があります。お電話下さい。

▼小林朗氏は「絶対評価」は個人内評価なので学力定着度以上に授業態度の評価が入り、主観が入りやすいこと、また高校入試資料では「相対評価」が使われるとして、過渡期で中学の現場で困っていることを指摘してます。

▼小林裕子氏の報告は興味深いものでした。家事、パート労働を担う四〇代女性はデジタルデバイドの一番の当事者、世界とつながり賢く生きるすべを持つのは容易でありません。

▼「学校給食は地産地消サイクルの中の直営・自校方式で」という雨宮講演、読んで納得です。

▼中野氏の問題提起、みなさん応えてあげて下さい。橋爪先生の見解をどう考えますか。

（本田）

にいがたの教育情報 NO.73

2003年3月30日発行

編集・発行　にいがた県民教育研究所

発行人　長崎　明

〒951-8116 新潟市東中通1－86 山崎ビル

電話・FAX(025)228－2924

振替口座・00640－0－12332

印刷所・中央印刷さぁびす

本誌内容の無断転載を禁じます。